

新刊紹介

十九世紀ロシア社会思想の先駆者たち

— Richard Hare. *Pioneers of Russian Social Thought. Studies of Non-Marxian Formation in Nineteenth-Century Russia and of its Partial Revival in the Soviet Union.* London, etc.: Oxford University Press. 1951. viii, pp. 205p.

大塚金之助

一九五一年の秋から冬にかけて、イギリスの一つの大学出版部とアメリカ合衆国の一つの大学出版部とが、それぞれ、ロシア思想史についての研究書を出版した。前者がヘア氏の著書である。著者は、十九世紀ロシア文学史についての著書で、すでに知られている。

私は、こゝで、ヨーロッパ諸国やアメリカ合衆国で使われている言葉の意味——アカデミックな、あるいは、一般向きの意味——での新刊紹介あるいは書評を書くこととするものではない。そのようなものは、イギリスでも、アメリカ合衆国でも、書かれるであらうし、また、私には、特にこの場合には、そのようなものを書く資格と素養とがない。私は、たゞ、世界各国の社会思想史にインテレストを持つ者の一人として、この書物を読んだあとの感想を書きなが

ら、戦後の五年間に、この国の一人の大学教授が、国際文化交流の非正常性や大学制度の改革等々によって、いかに研究や講義の上に新しい希望や任務——アメリカ社会思想史もその重要な一つである——と同時に新しい困難を持っているかを告白しようとするのである。

この書物の適切な新刊批評は、ロシア語が読めて、かつ、十九世紀ロシアの原典に近づき得る研究者によってなされるであろう。しかし、私は、ロシア語以外の外国語によって、知り得るだけを知り、学び得るだけを学ぼうとする⁽³⁾ことも、社会思想史研究の——もつとも非常に困難な——一部分であると考えている。事実、諸外国には、このような者のために、親切なビブリオグラフィやブック・リストやガイドができてきているのである。

まず、この書物の成立、目的および構成を見よう。著者は、一九四五年ごろにモスクワにいたが、どういう目的でソ連に滞在したかは、あきらかにされていない。著者は、この書物の準備にあたって、アメリカの諸図書館が所蔵しているロシアの rare books and periodicals のコレクションを活用し、これを活用し得たについては、ロックフェラー財団に深く負っていると述べている(序文六ページ)。

私たちは、今までにも、十九世紀ロシアの社会・政治思想史のシステムティックな研究をいくつか持っている。ロシア語以外の言葉で書かれたまたはロシア語以外の言葉に訳されたものとしては、チェコスロヴァキアの老マサリック(Masaryk)の名著があり、アメリカのものとしては、たとえば、J・F・ヘッカーのものがよく知られており、体系性においてははるかに劣るが、ロシアの自由主義者P・N・ミリュエーコフの著書のフランス訳もある⁽⁴⁾。

しかし、著者の目的は、exhaustiveに、また、体系的に、十九世紀ロシア社会思想の先駆者たちの思想構造を分

析し、その思想の由来と影響とを全面的にとりあつかうという・非常に複雑困難な課題をとり上げることはない。著者のとりあつかう『範囲はずっとせまく』、『少数のはっきりした代表的ロシア的人物』、『時間のテストに最も根づよく堪えて生きのこった人たち』(序文五ページ)十数人だけである。したがって、この書物では、十九世紀初頭のデカブリストたちの社会思想や、それと内面的関連を持っていた詩人プーシユキンの社会思想や、ナロードニキの人々や、十九世紀後半に西ヨーロッパのユトープピア社会主義の作用を受けたペトラシエウスキー(Petrashkevsky)や、すでにその偉大な思想体系が円熟しつゝあつた人類的文化遺産レオ・トルストイ等々については、ほとんど語られていない。

しかし、著者は、十九世紀のロシア原典を英訳してゆたかに引用し、また、そのとりあつかっている人物の思想の発展および構造を単純な型にはめずに、あるがまゝに述べているので、この書物は、十九世紀のマルクス主義思想以前のロシア社会思想史の複雑な性格を知るのに役立つのである。

私たちは、この書物によって、十九世紀ロシアの前マルクス主義的社会思想を理解することが、非常に困難なことを学ぶのである。

著者は、to be taken for grantedとして、当時のヨーロッパ諸国の経済、社会および政治の一般を説明する必要を認めていない。しかし、これらの思想家たちは、(仮りに訳して)スラヴ主義者たち(Slavophiles)であると(仮りに訳して)西ヨーロッパ主義者たち(Westernizers)であるとを問わず、すべて、ロシアの東方性および文化的立ちおくれと、西ヨーロッパの経済、社会および政治の発展とのあいだに立っていたのである。

彼らは、——スラヴ主義者でさえ——イギリスの産業革命による経済発展と社会問題とを見聞していた。彼らは、十八世紀フランスの啓蒙思想とフランス革命とその政治的結果とを知っており、ナポレオンのモスクワ遠征の失敗に自信を持っていた。しかし、この書物の全体を通じて、彼らのすべての重大な関心となったのは、十九世紀半ばの西ヨーロッパの政治的發展、ことに、一八四八年のヨーロッパ革命の敗北であった。この革命に好意をよせた人の場合でも、この革命に反対の立場をとった人の場合でも。十九世紀ロシアの社会思想家は、世紀半ばに社会的・精神的支柱を求めて苦斗していたのであるから、この革命の敗北は、彼らに大きなショックを与えずにはおかなかった。

また、彼らは、西ヨーロッパの社会的・政治的狀態にたえず注目していたばかりでなく——正しく撰取した者もあり、誤解していた者もある——、西ヨーロッパの社会事情の結果として發展しつつあった哲学、宗教、政治学、歴史学および社会思想の發展についても、敏感であった。彼らの多くは、眞剣にそれと組んで、あるいは、そのエッセンス（たとえばヘーゲルの弁証法）をとり入れ、これを自己のものとして、ロシア社会と戦い、あるいは、西ヨーロッパ哲学を排斥してそれと戦った。彼らのうちには（たとえば、一人のスラヴ主義者のように）、スピノーザに熱中したのもあった。ことに、彼らの多くは、カントからシェリング、ヘーゲルおよびフォイエルバッハへのドイツ哲学の發展に目を見張って、なかには、直接に、ドイツ哲学者への巡礼の旅をした者さえもあり、それぞれの立場から、ドイツ哲学を發展せしめ、あるいは、ドイツ哲学を止揚し、あるいは、それを排斥したのもあった。

彼らの一部は、西ヨーロッパの歴史家と会見し、あるいは、文通していた。彼らのうちのある者は、ロシア農民社会のなかで、イギリスやフランスの近代経済学を勉強した。彼らは、イギリスにおけるロバート・オウエンの協同組

合の実験や、フランスのサン・シモンおよびフリーエのユトーピア社会主義思想を研究し、なかには、その感化をうけたものもあった。彼らは、重くろしいロシア社会のなかから、西ヨーロッパの自由主義のメリットと害悪とにたえず注意して、それぞれの立場をとった。

著者がこの労作のなかでとりあげている人々は、極端なビザンティン主義的・親トルコ的なコンスタンティン・レオンティエフ (Konstantin Leontiev, 1831—91) をへつにすれば、スラヴ主義者たちと西ヨーロッパ主義者たちの二つのグループにぞくしている。

著者は、スラヴ主義者とは何であるかについて、一定の定義を与えていない。事実、著者の記述によれば、その明確な定義は与えられないであろう。彼らは、その出身において、その経歴において、その教養において、その主張、行動および社会理想において、それぞれちがっており、彼らには、共同の政治プログラムもなかったとされている。たゞ、彼らは、それぞれの経験と勉強との道をとって、共通の思想傾向を持つようになった。しかも、西ヨーロッパ主義者のなかにも——著者の意見によれば——それと共通の思想に近い思想を持つようになった人もあったために、十九世紀ロシアの思想家群像は、さらに複雑となってくる。しかし、スラヴ主義者には、ニュアンスのちがいはあっても、多少とも共通した思想傾向があった。彼らは、西ヨーロッパの経済、社会および文化を理解するのに困難を感じ、西ヨーロッパ文化は没落しつつあると観察して(西ヨーロッパ主義者のなかにもそういう人があった)、それを排斥した。彼らは、西ヨーロッパの自由主義、社会主義および革命的民衆運動を白眼で見ていた。彼らは、西ヨーロッパの合理主義的な哲学、教育および思想を排斥した。彼らは、ロシア民衆の信仰心とロシアの特有な宗教史に制約

されて、プロテスタントイズムを排斥し、カソリンズムをさえ排斥して、神秘主義的・正教主義的宗教を持っていた。その結果、彼らは、一方において、ロシアの歴史の若さを認めながら、他方において、ロシアの歴史のユニークな特異性を強調し、なかには、ロシア古代史の再検討を求めた者もあった。彼らは、十八世紀におけるピーター一世の異教的・西ヨーロッパ的な上からの強力な改革を批判し、ロシア特有の諸制度、土地制度、ことにミール (mir) 制度および中間的なオートクラシーへの愛着を持った。彼らは、ツァーとロシアの一般人民 (common people) との性格を美化し、両者の協調を希望的に確信した。彼らは、ロシアの農民暴動には、政治的要求はなかったとした。彼らは、西ヨーロッパの経済学、社会主義、『共産主義』および唯物性を排撃した。こうして、彼らは、スラヴ民族の世界的使命を確信し、俗物的な没落の世界の救世主としてのロシアのうつくしい使命を信じ、そのあまり、極端な人は、歴史的伝説をさえ作り上げたのである。

人々は、スラヴ主義者だからといって、それらの人々のすべてが十九世紀ロシア政府の検閲によって寛大にとりあつかわれたと思つてはならず、西ヨーロッパ主義者の場合には、政府の態度はことにきびしかった。スラヴ主義者であったイヴァン・クレイェウスキー (Ivan Kireyevsky, 1806—56) は、つぎつぎと雑誌を発刊したが、いずれも二—三号で発行停止となり、ある場合には、ニコラス一世自身が、彼の論説を精読し、『この論説は、文学をとりあつかうとしているようでもあるが、高等政治について、いくぶんとも危険な破壊的暗示をうすうすにおわせている』(八八ページ)と、雑誌のマージンに書き入れた。クレイェウスキーは、それから十一年間沈黙をつづけたのである。彼の弟ピーター・クレイェウスキー (Peter Kireyevsky, 1808—56) は、——著者によれば——彼の兄よりも、その主張

において一貫性とおちつきとを持っていたが、ピーターは、その一生を通じ、黙々として農村の所領地の改良を試み、昔のうつくしい民謡を集めていたので、彼が彼の思想を述べた重要な原稿は、彼の死後、彼の私文書のなかから見出されたのである(一〇一ページ)。ホミヤコフ (A. S. Khomyakov, 1804—60) は、教会側の検閲をさけるために、やむなく、彼の論説を、フランス語で書いて、外国で公表しなければならなかった(七九ページ)。十九世紀ロシアの検閲制度は、スラヴ主義者をもきびしくとりあつかったのである。

著者は、西ヨーロッパ主義者として、チャイダイエフ (Peter Chaadaev, 1793—1856) ベリンスキー (Vissarion Belinsky, 1811—48) チェルヌシシェウスキー (N. G. Chernyshevsky, 1828—89) キョウケンマン (Alexander Herzen, 1812—70) その他の人々をとり上げている。

著者は、スラヴ主義者の場合と同じような冷静さをもって、西ヨーロッパ主義者を取りあつかい、彼らの思想の成長、行きすぎ、未熟性、矛盾、動搖、円熟性、停滞および思想的後退を述べている。

スラヴ主義者の場合ほどではないが、西ヨーロッパ主義者の場合にも、また、さきばしった型にはめてむことは、困難である。チャイダイエフは、——著者によれば——保守的であったと云われているし、ロシアの『急進的なインテリゲンツィアの主要な創始者』(三五ページ)であったベリンスキーも、——著者によれば——複雑な性格の持主であったとされているし、『最も多才な・柔軟性があり・熱情的に人を説得し、そして皮肉に人をどきまぎさせる』(一一二ページ) ヘルツェンも、四〇年代の国際的ジェネレーションの人で、六十年代の人々とは思想的にあわなかつたとされている。彼らの社会的・政治的思想も、かならずしも一致していなかつた。

しかし、スラヴ主義者にくらべれば、西ヨーロッパ主義者は、ヨリ統一的な性格を持っていた。彼らは、ロシア社会を、ていつ的に批判しようとした。チャードイェフは、たいていのフランス人よりはフランス語をよく読み書きし、ロシアの厚生と、もし可能ならば、もう少し多くの自由とを求めた人であったが、彼は、ロシアについて、『何も生まないビザンティン崇拜』、『東洋的崇拜によって支持された一つの東洋的専制主義』(一八ページ)と云い、『私たちは、人類の大きな家族のどれにもぞくしていない』(九ページ)と云い、『私は、目をつぶり、頭をさげ、そしてつんぼの耳を持つ私の国を愛することはできない』(二一ページ)と云い放った。『ロシアにおける最も強力な知的な力』(三九ページ)となった・まずしいベリンスキは、ヘーゲルの歴史哲学に影響され、思想には、国民性も国境もないことを信じ、フランス社会主義のなかに、『諸理念の理念……諸問題の問題、信念と知識とのアルファとオメガ』(四五ページ)を見出し、またイギリスの議會をほめ、彼の云う国民性格も国際的ヒューマニズムにもとづいていた。チエルヌインシェウスキーは、——著者によれば——その思想に多少の内面的異動はあったが、彼は、全体としてのヨーロッパを理解しようとするため、哲学においては、ヘーゲル弁証法(ヘーゲルの全部をとり入れたのではない)とフォイエルバッハとをとり、経済学においては、イギリスおよびフランスの古典経済学の労働價值説をとり(著者は、彼のレッシング論とともに、テュールゴー論やJ・S・ミル評論をほとんど全く説明していない)、政治においては、絶対王制はもろんとらなかつたが、共和制よりもむしろ limited monarchy をとり、社会主義的協同思想については、フリーエ、オウエンおよびミルをうけつぎ、その百科全書家的教養をもって、強固な『改良家および行動の人』(一八三ページ)となった。このヒューマニスティックなロシア思想家は、あらゆる困難に堪えて終始、西ヨーロッパ主義

者として一貫した。著者は、年代順にしたがわずに、最後にヘルツェンをとりあつてはいるが、彼は、一八四七年に西ヨーロッパへ去った。彼は、ヘーゲル哲学の一部をとり、サン・シモン、フーリエおよびオウエンの思想にひきつけられ、一八四八年革命に失望し、ヨーロッパの市民的価値標準がヨーロッパ没落の原因であるとし、アメリカとロシアとに希望をつなぎ、結局、このヒューマニストは、ロシアのミール制度に着眼して、ユニークなロシア的社会主義を考案したが、その結論を出すことはできなかった。彼の西ヨーロッパ生活は、当時の世界市民の苦難をもともなつたが、——著者によれば——彼の思想的な意味は、『ロシアとヨーロッパとの政治思想の橋わたしとなつた一人の遠く見とおす寛大な人間像であり、また、二つのあいだの・まだ生きてゐる心理的な一つのつなぎで』(二六九ページ)あることにある。

西ヨーロッパ主義者の場合に、官憲の態度がきびしかったことは、云うまでもない。チャーダイエフの雑誌は、発行停止となつた。ニコラス一世の時代に生じはじめた精神的停滞状態に反対し、当時のロシア国民をゆるい国民としたペリンスキーは、大学の学生生活から追放された。チエルヌイシエウスキーは、二十年のシベリア流刑生活をおくらなければならず、——著者によれば——この二十一年間に彼の思想は、あまり進歩することができなかった。ヘルツェンは、その五十八年の人生のあいだに、一回のシベリア流刑と二十三年の外国生活とを体験して、晩年には、自分の社会的・政治的影響力の急速な衰えを悲しんだのである。

なお、この書物には、イギリスで印刷されたものとしては、誤植が多い。

以上、私は、この書物を十九世紀ロシアの前マルクス主義的社会思想史の一資料としてとりあつた。しかし、

それにしても、現在の事情のもとでは、この時代の思想の研究も、研究としてさえも、非常に困難であることを、この書物は教えている。もし、私の読みちがいでないならば、著者が、これらの思想家の評価やその著作集の編集が政治的考慮によって変化し、再変化したことを指摘し、十九世紀の思想と現在の思想傾向とをくらべながら、そのあいだの思想発展の道すじを論理的に暗示していかないのは、この困難の一つの現われではないかと想像される。

正確な記録が手もとにないので、もし、私自身の私的な経験を語ることに許されるならば、私が、コロンビア大学で、ロンドン大学で、ベルリン大学で、社会思想史や社会主義思想史の講義を聞いたのは、今から三十年以上もまえのことであった。色とりどりはあるが、ともかくも『民主主義』を持った諸国においては、一流の大学にこのような講座がおかれていて、それぞれの立場はちがうにしても専任教授がおかれていたのは、当然のことであった。しかし、私たちの国では、大学に、社会思想や社会思想史の講座がはじめて公然とおかれたのは、第二次世界戦後のことであり、それに応じて、この国でも、十数年の空白期間のうちに、社会思想史に関する一般書やモノグラフィがつぎつぎと出版された——と聞いたならば、先進諸国の人々はさぞかしおどろくことであろう。

なお、その上に、私たちは、研究手段としての外国語の勉強にも大きな制約をうけた。大正年代には、大学は、イタリア語やロシア語の講座までも持っていたが、それらもまもなく廃止され、戦時中には、英語さえも虚遇され、私たちの母国語の文章を英語のように左横書きにすることさえも排斥された。日本の降服とともに、この点でも、事情は変化した。すぐれた二―三の大学やギムナージウムは、第一外国語としての英語を強化し、さらに、第二外国語として残っていたドイツ語、フランス語および華語のほかに、新しくロシア語の講座をひらいた。しかし、それとても、

たとえばコロンビア大学が一教授が辞表まで提出して反対したのをふりきって、国際的理解のために、戦後、ポーランド国民詩人記念講座をおいたことを思えば、私たちは、まだまだ学問的国際家族のなかのおとなになりきってはいな

な。戦争の五年のあいだ、ほとんどまったく、先進諸国の文化中心地で出版される書物から切りはなされていた私たちが、降服と同時に、それらの書物を見たいという飢えを持ったことは、戦後まもなく、サー・スタンレー・アンウィン (Sir Stanley Unwin) が、ロンドンの『タイムズ』の投書欄に投書したとおりであった。しかし、この国の大学の教師の月給は安く、しかも、この戦後インフレーションのなかでは、私たちは、いまだに、先進諸国の出版物を exhaustive に・系統的に調査することも、自分の教養や専門的研究に必要なとする書物を海外に注文することも、十五年前のようにできないのである。

ロシア社会思想史は、一般的社会思想史の観点からは、特殊問題にぞくするかもしれない。しかし、私がヘア氏の著書をこゝにとり上げたのは、その一般的社会思想史の研究そのものさえもが私たちにとって持つ諸困難を、この著書が特に私に意識させてくれたからである。

(1) たとえば、The Times Literary Supplement, Nov. 16, 1931 の新刊批評。周知のように、この附録にのるものは、すべて署名がないのであるが、執筆者は国際的で、世界の誰が書いているかわからない。この批評によれば、十九世紀ロシア思想史の研究としては、すでに、老マサリックの大冊ものがある。ヘア氏の書物は、そのような『一つのシステムティックな研究』になつておらず、十九世紀思想家と近時のソヴェエットの態度とを結びつけようとする企図も『真剣にはとり上げられて

おらず』、初期西ヨーロッパ主義者たちの思想家の列挙も『何ものも新しいものをふくんでおらず』、ペリンスキーやヘルツェンについての諸章も『ふみなれた地面を巡回しており』、チェルヌイシエウスキーについては、『彼の積極的な地位を確立しそななっている』。一般的に云って、この書物は、『歴史的環境』や『これらの思想家が代表する歴史的發展の進行』を十分に示していない。この書物のなかの一番いっ諸章は、世紀半ばのストラグ主義者に関するものである……しかし、『ドストイェウスキーの政治的文書は、全然討論されていない』。全体として、これは、問題意識においても、解明の効果においても、どちらにおいても、『コロゴロの書物』であり、著者は、『もっと厳密に限定された題材を』とり上げたならばより成功したかもしれない、『ステイルの快明性』にも、あまり注意がはらわれていない——なかなか手きびしい書評である。當時、イギリスの新聞雑誌は、たいへんおくれて到着していたので、私は、この稿を書き上げたあとで、この書評を読んだ。

(2) たとえば、この書物のアメリカ版の新聞批評は、『The New York Times Book Review, Jan. 6, 1952』、フ・ミラー (Rene Fuellep-Miller) が書いている。彼は、『ドイツを亡命した著述家およびジャーナリストであるから』、ヘア氏の書物を、社会思想史の研究書としてこまかく分析するよりも、十九世紀のロシア思想家を現在のソ連の態度と結びつけようとする原著の二つの (二つである) 問題方向のほうに重点をおいている。

(3) Avrahm Yarmolinsky (Ed.), Pushkin in English. A List of Works by and about Pushkin. Compiled by the Slavonic Division. New York: The New York Public Library 1957. 32 pp. 四八〇あまりの単行本および新聞雑誌項目をリストしてゐる。このリストは、『ノイシエキニ死亡百年記念のために公刊されたものである。こゝにリストされたものの中には、ドイツ語、フランス語およびイタリア語等々の翻訳や研究が無数にあることは、言うまでもない。』

(4) Julius F. Hecker. Russian Sociology. A Contribution to the History of Sociological Thought and Theory. New York: The Columbia University Press 1915. 309 pp. このマテリアル論文は、『当時の代表的アメリカ社会学者ギディングス (Giddings) 教授の親切な指導のもとで書かれたものである。』

(9) P.-N. Milonkov. Le Mouvement Intellectuel Russe. Traduit du Russe par J.-W. Bienstock. Paris: Bossard
1918. [iii], 449 p. 著者は、ロシア臨時政府の外務大臣であつた。この書物は、誰しものがとり上げるチエルヌイシエウスキー
を全然とり上げていない。

(一九五二・三・五)